

JSIR NEWS LETTER

国際リハビリテーション研究会

vol.17 2022年10月28日発行

巻頭言 『ニュースレターの活動を通して』

古川 雅一（国際リハビリテーション研究会事務局、
仙台医健・スポーツ専門学校）

〔巻頭言〕
『ニュースレターの活動
を通して』 古川雅一

〔特集〕
『ベトナムで活躍する
JICA海外協力隊[後編]』
中島涼子
福崎聖子

〔連載〕
『山口高橋の研究万華鏡』
『論文つれづれ』
山口佳小里

〔コラム〕
『世界のめがね』
『ドイツ国際平和村から
感じる共生のヒント』
勝田茜

〔お知らせ〕

現在、私はこのニュースレターの編集担当の一人として多くの皆様のご協力をいただきながら活動を行わせていただいています。日頃お世話になってます編集チームの皆様やこれまで記事の作成にご協力をいただいた皆様には心より感謝を申し上げます。

作成にあたっては国際協力活動についての執筆依頼のほか、時には海外へのオンラインインタビューなども行わせていただいております。出来上がった原稿を通して、皆様の国際協力活動の事例やお考えを知り、私自身の過去の活動の疑問に対する気づきや今まで知らなかった国際協力の形を知ることができ、毎回大変興味深くまたありがたく拝読させていただいております。

今年度、国際リハビリテーション研究会のホームページの運用が開始され、過去のニュースレターが掲載されるようになりました。何かのご縁で記事をご覧になられた方の国際協力活動の参考や、また新たに国際協力へ関心を持たれる方のきっかけの一部になれば大変嬉しく思います。

withコロナが少しずつ進み、国内・国外ともに人流が再開してきていますが、今後も多くの皆様の国際協力に対するお考えや実践例などを掲載させていただくことが出来たら幸いです。

どうか今後とも、何卒よろしくお願いいたします。

[特集] ベトナムで活躍するJICA海外協力隊

後編

～ コロナ禍を経験したお二人が目標とする「楽しいリハビリ」～

前号に続き、ベトナム派遣中のJICA海外協力隊（以下:協力隊）

のお二人からお話を伺いました。

本号では、ベトナムでの活動の様子や生活、お二人の今後の抱負などをお届けします。

～前号の振り返り～

- 1) 協力隊に参加したきっかけは？
- 2) コロナ禍による待機期間中の「想い」やその間の活動について
- 3) コロナ禍における派遣前訓練の様子について

中島涼子(なかしま りょうこ)さん
2021年度1次隊 ベトナム 理学療法士

福崎聖子(ふくざき きよこ)さん
2021年度5次隊 ベトナム 言語聴覚士

インタビュー：
編集担当 古川雅一

4) 首都ハノイや任地の様子について

中島

2021年11月にハノイに着き任地のモクチャウに移動しました。任地はちょうどコロナが流行した時期でした。配属先で陽性者が出た際には外国人という理由で私は10日間外出が禁止となりました。ホームステイ開始直後で慣れていなかったのが少し辛かったのを覚えています。制限が解け活動が始まってからは楽しく過ごせています。ホームステイ先に不便はありません。ハノイに関しては私が到着した頃はコロナにより多くのお店が閉まっていたいました。



【サッカー東南アジア大会でベトナムが優勝した時の様子】

私は2022年5月にベトナムに来ましたが6月現在ではハノイの店は概ね営業している状況です。マスクは大気汚染のため着用する習慣があるようですが、屋内では未着用の方も増えていると聞きます。また、入店時の陰性証明提示も必要だったそうですが現在は求められるケースは少ないです。入国時のPCR検査結果提示の義務付けも5月中に解除されています。美味しいと評判の飲食店が閉店したのは残念です。ただフォーはどこで食べても美味しいですね。

福崎



5) ベトナムのPTや配属先について

中島

ベトナムには理学療法（以下:PT）を学ぶ大学は7つ存在します。国家試験制度は無く、卒業を機に理学療法士を名乗るようになります。首都ハノイでは大学の卒業生が多く日本のPTと行われていることは近い部分があるとお聞きします。配属先の病院はリハビリ科が誕生して4年目になります。前任者はその立ち上げへ関与した後、必要な道具の準備やリハビリの考え方の伝達が行われています。私の役割はその発展を手伝っていくことになります。リハビリ科の同僚は現在3名で1名は大学を卒業しています。他の2名は3か月程度リハビリについて勉強をした方々になります。この2名から質問を受けることが多く特に動作観察が難しいとの相談が多いです。あと配属先のリハビリ科の特徴としてはPTのスタッフがカルテを記載する習慣がないということです。カルテ自体は存在していますがリハビリ科の情報は医師や他科の看護師が聞き取りを行い記載しています。



【活動の様子】



【症例さんとの1枚】

古川



同僚には大学を出ていない方もおられるとのことですが、
同じように働くことは可能なのでしょうか。

中島



はい。同じくリハビリ科に採用されればPTに従事することは可能となっています。やはり大卒者と比較し知識や技術の差は大きいようで、どのように評価や治療を進めていくのか手探りで働かれている印象を受けます。また現在の活動ですが、ボランティアに何を期待されているのかをお聞きした際に勉強会を開催して欲しいとの回答がありました。ベトナム語は難しいですが資料を用いれば何とかお伝え出来ると感じ、月に一度リハビリ科のスタッフや医師とともに勉強会を実施しています。資料提供は非常に喜ばれますね。症例へのPTの実施ですが、はじめは1人で実施していましたが徐々にベトナム語でスタッフと会話が出来ようになり、現在では一緒に症例を見たり、訓練内容についての伝達や引継ぎの実施をおこなったりしています。

職場はJICAに対しての理解があり、ボランティアは日本のPTを伝えにきているのでマンパワーではないと認識されています。ボランティアに期待されている部分にプレッシャーも感じますが、お伝えしたことが取り入れられているのを見ると嬉しく感じます。

福崎



6) ベトナムのSTや要請内容について

現在6月上旬ですが下旬より私の活動は開始となります。配属先はソンラ省リハビリテーション病院です。過去に理学療法士や作業療法士の協力隊が活動していた病院になります。実際の状況は任地に行かないと不明ですが、要請書では言語聴覚療法（以下:ST）部門は理学療法士3名と看護師2名のスタッフで運営されており、将来的には言語療法センターを設置する構想があるとのこと、主な要請内容は失語や高次脳機能障害への対応です。ベトナムのSTについてですが、日本で言語聴覚士の資格を取得したベトナム人より聞いたところによると、一部の大学のPT科をSTにも対応できるようにリハビリテーション科に改め、その科を卒業した方がSTの対応をしているとのこと。しかし元はPT科であるためSTの授業内容は少ない印象であると話されていました。また、ベトナムにおける主なSTの場面は嚥下であり失語や高次脳機能障害への対応はあまり耳にしないとも話されていました。あくまで現地の言語聴覚士1名からの情報なので違う場面もあるかもしれませんが、まだまだ私自身がベトナム語を話せない状況で活動が始まるので、失語や高次脳機能障害についてどのように活動を進めていくことが出来るか悩んでいます。まずは現地の人々の失語や高次脳機能障害に対する理解を調査することが必要だと感じています。そして基本的な評価の方法についてお伝えが出来ればと考えています。



【語学学校でのプレゼンの様子】



【JICA事務所にて同期隊員との写真】

古川



ST実施に際するベトナム語と日本語の違いはありますか？

福崎



ベトナム語は音だけではなくイントネーションで単語の意味が変わることが特徴に感じています。音が間違っているにもかかわらずイントネーションだけで理解出来てしまう部分も一部ある印象です。また文字には音だけではなく発音やイントネーションを表す記号が示されているのも特徴です。日本語の「ひらがな」と異なり「漢字」は形を見ただけで意味が分かる場合がありますが、同様の特徴がベトナムの文字にはある印象です。またそれが現地の失語を理解するポイントの一つと予想しています。しかし、言語の細かい部分を突き詰めるよりも、言語において障害を持つ現地の人々の日常生活で困っている部分の解決を忘れずに考えていきたいと思っています。まずは目の前を楽しく過ごせるように関わらせていただきたいと思います。

中島



4) 今後の抱負について

目標は配属先のリハビリ科を利用する患者さんの満足度を高めることです。

また同僚と一緒に楽しいリハビリを作っていきたいと感じています。何が出来るか悩むことはありますが、同僚も良いリハビリを提供したいと考えていますので、一緒に進んでいきたいと感じています。

STはリハビリテーションの中でも固くわかりにくいイメージを持たれている場合があると感じています。しかし、ヒトの特徴である言語へのアプローチは楽しく、過去の臨床で感動的な場面に出会えることもありました。それを少しでもお伝えできればと感じています。でもまずは、「STはしんどい」ではなく、「楽しいぜ！」って思われるように私自身楽しみながら活動したいと思っています。

福崎



中島さん、福崎さん、ご協力ありがとうございました！

お二人共通の「楽しむリハビリ」の実現と2年間のご活躍をお祈りいたします。

[連載] 山口高橋の 研究万華鏡*

『シリーズ論文を書く① 背景について』

「研究に興味があるが、何をすればよいのか分からない…」という声にお応えし、気まぐれに研究について綴ります。

思い立って、論文執筆に関するシリーズを開始してみようと思います。今回は、論文の始まる部分である【背景】について書いてみます。いわゆる科学論文は、全体の構成（背景、方法、結果、考察）とそれぞれの章に書くべき内容が概ね決まっています。一見すると、背景には研究テーマに関連がありそうな、それっぽいことがあれこれ書いてあるように見えるかもしれませんが、研究を遂行する上で必要なことが書かれています。▼まずは、「研究の位置づけ」。その研究のテーマが、どのような社会的・学術的領域に関する事項なのか説明する必要があります。▼そして、「先行研究のレビュー」。研究のテーマに関する先行研究をレビューし、どこまで明らかにされているのか、そして何が明らかにされていないのか（かつ明らかにする必要があるのか）を明確に論じる必要があります。時々、自身の研究テーマに関する先行研究がない、という言葉を目にすることがありますが、完全に一致するテーマでなくても周辺については知見があるはずですので、何もレビューできないということはないはずです。▼ここまでできてようやく、自身の研究の「問い」を明確にでき、その問いに応えるための「目的」を書けるということになります。▼論文の背景、方法、結果、考察は全て（当たり前ですが）繋がっており、背景に書かれた内容も（当たり前ですが）整然と繋がっているはずです。常に全体の流れを意識し、飛躍的な論理展開がないか確認しながら執筆するとよいのではないのでしょうか。▼山口のセンスでざっくりまとめてみました。しっかり学びたい方には著書「研究の育て方」¹⁾等がおすすめです。1) 近藤克則著. 研究の育て方. 医学書院 (2018) (国際リハビリテーション研究会事務局理事、国立保健医療科学院、山口佳小里)

[コラム] 『世界のめがね』

[ドイツ国際平和村から感じる共生のヒント]

勝田 茜
(国際リハビリテーション研究会事務局、
姫路獨協大学)

世界中で活動を展開している会員のめがねを通した世界の姿を各号お届けします。今回は、**ドイツ**からです。



写真提供：ドイツ国際平和村

ドイツ西部に位置するオーバーハウゼンという街にドイツ国際平和村(FRIEDENSDORF INTERNATIONAL)があります▼そこでは、アフリカや中央アジアなど様々な地域の国から治療が必要な子どもがやってきて、生活しています▼常時200人くらいの子どものたちが生活を共にしているため、ケンカは日常茶飯事です▼アフガニスタンから来たばかりの男の子が、アンゴラの男の子とケンカをすることもしばしばです▼原因は「女の子に触れて、しゃべっていた。」です▼アンゴラの子どものにとって、男女関係なく友達と肩を組むことや、横に座っておしゃべりすることは自然です▼しかし、アフガニスタンの子どもにとってはそうではありません。各々の国で宗教や文化が異なり、家族からの教え、大切にしていることも異なるようです▼ケンカの原因を聞き、どちらも間違っていないことを説明すると、意外とあっさり仲直りします▼子どもはとても柔軟です。理解すればお互いを尊重し、仲良く生活します▼子どもたちは多様な人々が共に快適に生活するヒントを日々教えてくれました。

[お知らせ]

【国際リハビリテーション研究会 第6回学術大会 開催】

テーマ：国際リハビリテーションの新たな可能性：内なる国際化への貢献を目指して

日時：2022年11月13日（日）10:00～16:30

会場：国際デザインセンター セミナールーム（愛知県名古屋市中区）

参加費：会員1,000円 非会員2,000円 学生1,000円

申込締切：11月11日（金）

参加申込受付中！ <https://forms.gle/v2mJ5garXAnb3Lwh8>



[大会HP](#)



[参加申込](#)

【国際リハビリテーション研究会 第7回学術大会 開催概要】

日程：2023年11月 場所：東京都

詳細については今後広報します。お見逃しなく！

【年会費お支払いのお願い】

2022年度の年会費のお支払いがお済みでない方は、年会費のご入金をお願いいたします。

口座情報等は、[HP](#)をご参照ください。

編集後記

本号では、前号に続き、派遣中の協力隊員からのお話を聞くことができました。国際リハ研究会には、リハビリテーションを軸に様々な経験と知見を持つ仲間がいることを実感します。そして、それが本研究会の面白さと強みであると感じています。次号以降もそんな魅力ある皆さんの活動をお届けできればと思います。（大西海斗）
特集後編では、コロナ禍の任地の様子や苦労を知ることができました。その中でも「楽しい」と思える力強さを感じました。今後も様々な立場で活躍されている仲間の紹介ができるよう努めていきます。（長田真弥）

事務局 編集担当

古川雅一（仙台医健・スポーツ専門学校）

長田真弥（姉ヶ崎ケアセンター）

三田村徳（東北医科薬科大学病院）

大西海斗（コーエイリサーチ＆コンサルティング）

高橋恵里（東北福祉大学健康科学部）

山口佳小里（国立保健医療科学院）

【研究会HP】 <https://int-rehabil.jp/>

【研究会FaceBook】 <https://www.facebook.com/pages/category/Nonprofit-Organization/>

国際リハビリテーション研究会-1951070205159667/

【お問い合わせ】国際リハビリテーション研究会事務局 jsir.office@int-rehabil.jp

[JSIR HP]

